

乳幼児のスマートフォン使用と保護者の使用状況及び意識との関連性

1) 桧垣 淳子 2) 萩尾 耕太郎 3) 松尾 美久

Relationship between Parents' Usage and Awareness And Infants' Habit of Using the Smartphone

Junko Higaki Kohtaroh Hagio Miku Matuo

(2020 年 11 月 25 日受理)

はじめに

平成 22 年に 9.7%だったスマートフォンの保有率は平成 30 年には 79.2%となり、今ではパソコンの保有率を上回っている¹⁾。携帯性に優れ、電話やメールの他、ネット検索、ショッピング、SNS の利用、動画視聴、ゲーム、写真を撮る・見る等何でもできるスマートフォンは今や私たちの生活において欠かせないツールとなっている。

大人の利用拡大に伴い懸念されてきたのが、スマートフォン利用の低年齢化と長時間使用である。2014 年、日本小児科医会²⁾は「スマホに子守をさせないで」という啓発ポスターを作成し、保護者らに乳幼児期の長時間利用を控えるよう注意を呼びかけた。それらの動向に伴い、乳幼児期のスマートフォン使用の実態や保護者の意識を明らかにするための調査⁴⁾⁵⁾⁶⁾が実施され、現状や課題が浮かび上がってきた。これらの調査では、乳幼児のスマートフォン使用の低年齢化が指摘され、使用頻度や時間が増加していると報告されている。我々も平成 27 年、28 年に保育園、幼稚園に通う子どもの保護者を対象に調査を行った⁷⁾。その結果、乳幼児期の子どものスマートフォン使用は一般的になっており、使用が低年齢化していることが示された。しかし、乳幼児が長時間使用している割合は少なく、ほとんどの保護者は使用時にルールを決め、保護者の管理のもと節度ある使用を心掛けていることが明らかになった。子育てにスマートフォンが深く入り込み、保護者は多用しているのではないかと推測したが、過度に心配をしなければならないという結果ではなかった。その一方で、よくない思いながらも手

軽に、あるいはやむを得ず子どもに使わせている保護者の様子もうかがえた。子育て中の親は、悩みながらも、スマートフォンを育児の負担を軽減できる便利なツールとして使用していることがわかった。

本研究では、乳幼児期のスマートフォン使用の現状に加え、保護者の利用習慣を調査し、親の使用状況が子どもの使用に及ぼす影響について、さらに明らかにすることを目的とした。

研究方法

1. 対象者

福岡市の私立保育園に通う未満児、年少、年中、年長クラスの子どもの保護者 114 名を対象とした。アンケート配布数は 160、回収数は 114 であり、回収率は 71.2%であった。対象者は、性別:女性 98.2%、男性 1.8%、年代:20 代 11.4%、30 代 64.9%、40 代 23.7%であった。就労形態は、フルタイム 49.1%、パートタイム(時短勤務含む)48.2%、その他 1.8%、無回答 0.9%であった。

2. 調査方法および期間

調査は、質問紙による自記式無記名で実施した。期間は、令和元年 8 月 1 日～8 月 10 日とした。

執筆者紹介: 1)中村学園大学教育学部児童幼児教育学科 2)中村学園大学短期大学部幼児保育学科
3)姪浜もみじの森保育園
別刷請求先: 桧垣淳子, 〒814-0198 福岡県福岡市城南区別府 5-7-1 jhigaki@nakamura-u.ac.jp

3. 調査内容

対象者には、性別、年代、就労形態、スマートフォン所持の有無、主な使用用途、使用時間を質問した。また、スマートフォンに関する情報（使い方・影響）の入手場所、知りたいことや内容、及び子どもと一緒にの時に自身の使い方を気にするかについて質問した。乳幼児に関しては、年齢・性別等の属性に加え、子どもの使用の有無、使用開始時期、誰と使用しているか、使用頻度（平日・休日）、主に使用する機能と具体的な内容、行える操作、使用場面、使用に関するルールを設問とした。子どもが行える操作、保護者がスマートフォンを使用する時の意識、使用場面に関しては5件法を用いた。なお、兄弟がいる保護者には長子に関して回答をお願いした。

4. 統計処理

まず、各設問の回答ごとに単純集計をおこなった。また、関心ある項目の関連性に着目し、質問項目内と項目間でのクロス集計をおこなった。その後、選択された回答項目間における有意な相違点の有無を検証するために、集計結果に対して χ^2 検定をおこなった。なお、有意水準は $p < 0.05$ とした。

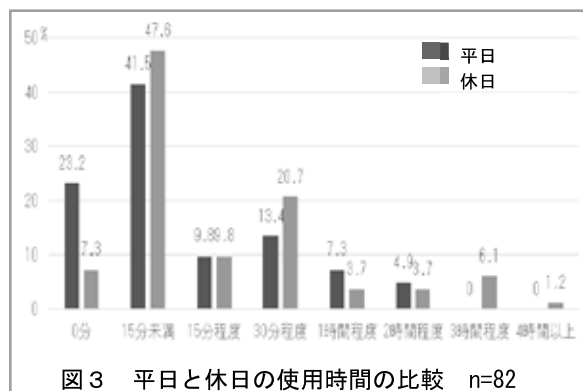
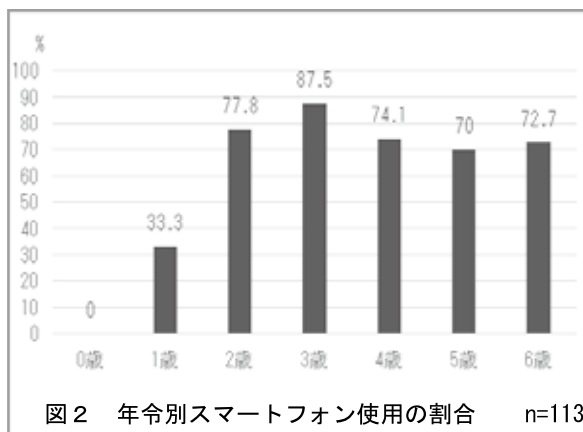
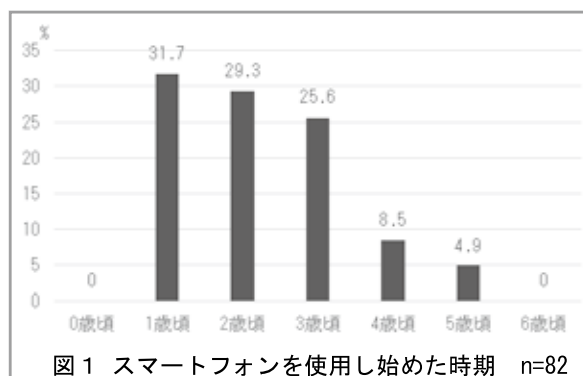
結果と考察

1. 乳幼児のスマートフォン使用の現状

1) 使用率、頻度、時間（平日・休日）

乳幼児の約7割が、スマートフォンを使用していた。回答者の98.2%が20代～40代の女性であることから、母親のスマートフォンを使用したと考えられる。使用開始年齢は、1歳頃 31.7%、2歳頃 29.3%、3歳頃 25.6%であった。全体の85%以上は3歳頃までに使用を始めており（図1）、先行研究⁵⁾⁶⁾と同様、低年齢からの使用が認められた。年齢ごとの使用割合は、1歳児は約3割であったが、2～6歳は7割以上であった（図2）。先行研究⁴⁾⁷⁾においては、年齢を追うごとに使用率は増加していたが、本調査では、2～6歳のどの年齢も7割以上の使用がみられた一方、各年齢共に使用していない子どもが約3割存在した。使用時間は、平日、休日共に15分未満が約4割以上で最も多く、次いで平日は0分（23.2%）、30分程度（13.4%）、休日は30分程度（20.7%）と続き、平日・休日共に30分以下の使用が約8割以上という結果となった（図3）。一方、2時間程度以上使用する割合は、平日4.9%に対し、休日11%であり、平日よりも休日の方が長時間使用する傾向にあった。

図7のスマートフォンを使用する場面の結果では、子どもが使いたがる、あるいは家事などで手が離せない、外出先での待ち時間、子どもを静かにさせたいといった使用場面での頻度が高い傾向にあり、子どもにス

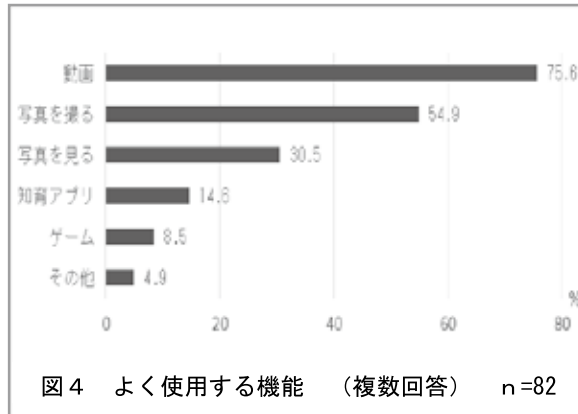


マートフォンを使用させている保護者は、子どもからの要求あるいは保護者の都合により使用させていると推測できる。

2) よく使用する機能、子どもがスマートフォンで行える操作

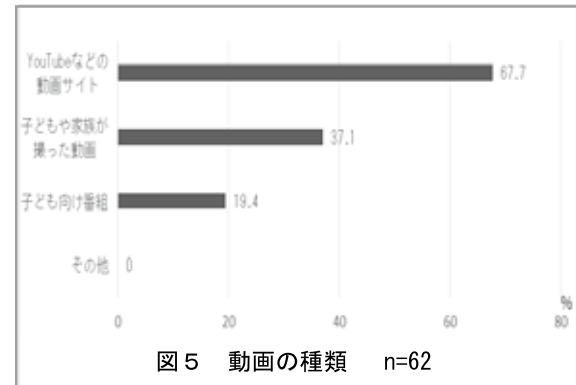
主な使用機能は、動画を見る（75.6%）、写真を撮る（54.9%）、写真を見る（30.5%）となった（図4）。先行研究⁴⁾⁵⁾においても、この3つは上位を占めており、幼児期の子どもの使用機能の中心であると言える。動画の種類については、YouTubeなどの動画サイトの使用が67.7%、子どもや家族がとった動画が37.1%、子ども向けの番組19.4%であった（図5）。子どもや家族がとった動画が視聴の中心ではないかと考えていたが、YouTube等の動画視聴が約7割弱と多い傾向にあった。YouTubeなどの動画サイトの利用と子どもの使用時間

に関しては、関連が見られなかった。YouTube などの動画サイトはコンテンツ数が膨大であり、視聴者の興味関心のありそうな動画を推薦する(サジェスチョン)機能もあり、使用時間が増加する傾向があるのではないかと予想したが、動画サイト等の使用は必ずしも使用時間の増大につながるとは限らないようである。



知育アプリの使用は全体の2割以下(14.6%)であり、総務省調査⁴⁾(0~6歳の知育アプリの利用は約4割)と比較して少ない傾向であった。知育アプリの利用に比べ動画視聴や写真を撮る・見る割合が高いことは、本研究の保護者は、学習への興味や関心が高まるといった教育的な効果を期待してスマートフォンを使用させているわけではないと考えられる。

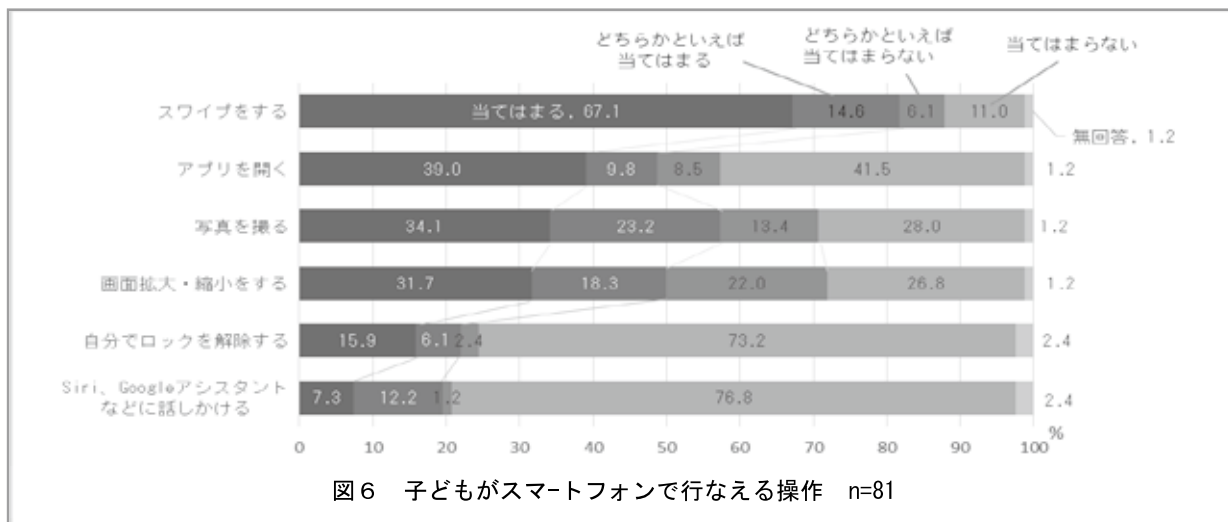
図6に、子どもがスマートフォンで行うことができる操作を5尺度の程度で示した。「スワイプをする」は、当てはまる(67.1%)、どちらかという当てはまる(14.6%)を合わせると、全体の8割はできるという結果となった。「写真を撮る」は57.3%(当てはまる, 34.1%, どちらかという当てはまる, 23.2%)、「画面を拡大縮小する」は50%(当てはまる, 31.7%, どちらかという当てはまる, 18.3%)、「アプリを開く」は、48.8%(当てはまる, 39.0%, どちらかという当てはまる, 9.8%)、となり、乳幼児期の子どもの半数程度は、これらの操作が可能であることがわかった。「自分でロ



ックを解除する」ことができる子どもの割合は22%と他のできる操作と比べ少ない傾向にあるが、子どもが自由に使えることに繋がるリスクがあるので留意する必要がある。

3) スマートフォンを使用する場面の頻度

図7に、スマートフォンを使用する場面の頻度(5尺度)を示した。「よく使用する」「時々使用する」を合計した割合でみると、「子どもが使いたがる時」(45.1%)、「家事などで手が離せない時」(42.7%)、「外出先での待ち時間」(34.2%)、「子どもを静かにさせたい時」(29.3%)となった。以上の結果から、4割以上の保護者は、頻度は違えども「子どもが使いたがる時」に使用させており、子どもからの要求に応じてスマートフォンを使用させる傾向が伺えた。また、3割以上の保護者は「家事などで手が離せない時」「外出先での待ち時間」「子どもを静かにさせたい時」といった保護者の都合でスマートフォンを使用させていた。その一方、半数から8割の保護者は「布団やベッドに入ってから寝るまでの時間」(81.7%)、「公共交通機関での移動時間」(64.6%)「自分の時間を持ちたい時」(58.5%)「子どもを静かにさせたい時」(47.6%)といった場面では全く使用しないと回答しており保護者の意識の二極化がみられた。



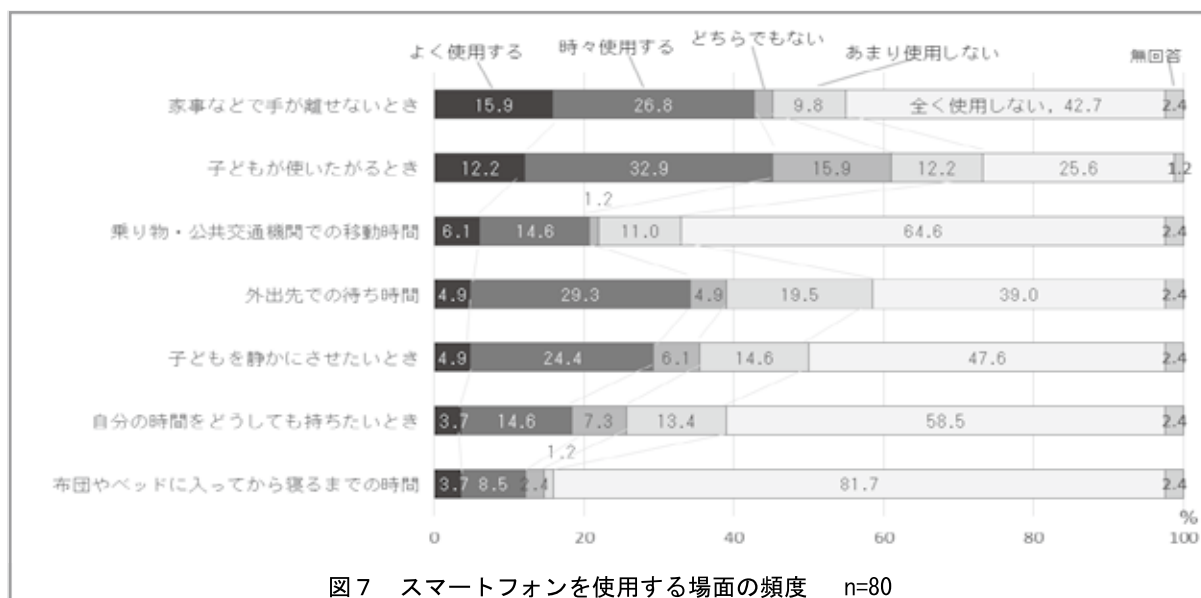


図7 スマートフォンを使用する場面の頻度 n=80

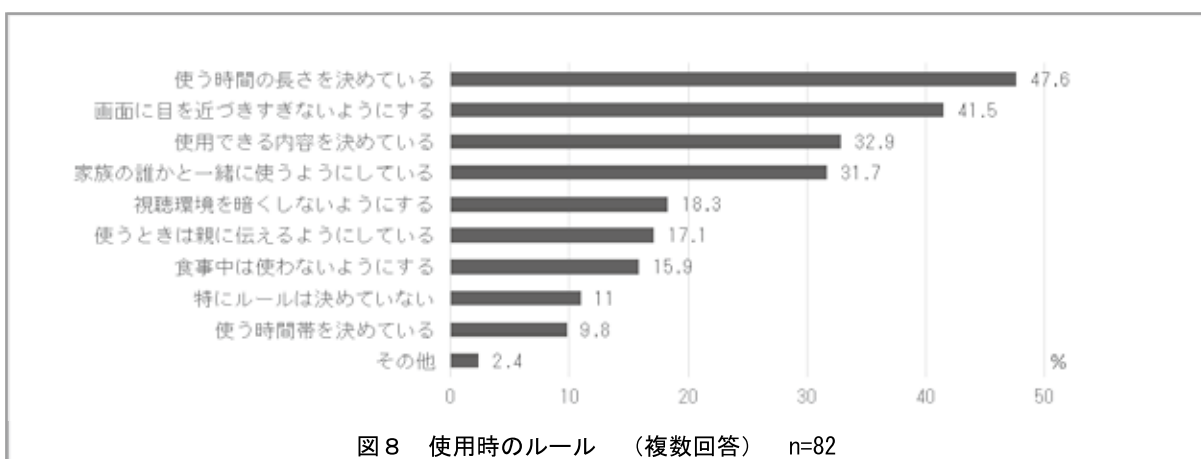


図8 使用時のルール (複数回答) n=82

「よく使用する」割合でみると、「家事などで手が離せない時」が15.9%、「子どもが使いたがる時」が12.2%であり、「時々使用する」割合でみると、「子どもが使いたがる時」が32.9%で最も多く、次いで「外出先での待ち時間」(29.3%)、「家事などで手が離せない時」(26.8%)となり順位が逆転した。これに関しては推測の域を出ないが、家事の場合には手が離せないため、比較的手軽にスマートフォンを使用させており、子どもが使いたがる時は、いつもでは好ましくないが、時々であればよいだろうという保護者の意識があるのではないかと考えられる。

4) 使用のルール (図8)

本研究においても、約9割の保護者は子どもの使用にあたりルールを決めていた。使用時のルールとしては、「使う時間の長さを決めている」(47.6%)、「画面に目を近づけすぎないようにする」(41.5%)と回答した保護者が約4割強、「内容を決めている」(32.9%)、「家族の誰かと一緒に使うようにしている」(31.7%)と回答した保護者が約3割を占めた。以上のことから、長時間使用や

不適切な内容に触れないよう留意していることがわかった。しかし、ルールを決めているかと使用時間には有意差は見られず、ルールを決めているからといって必ずしも使用の時間が短いわけではなかった。

我々の先行研究⁷⁾に比べ割合が高くなっていた項目は、「画面に目を近づけすぎないようにする」(41.5%)という視力へ配慮したルールであった。知りたいことのトップにも視力など目に与える影響が挙げられており、保護者の視力に対する不安は大きいと推測される。学校保健統計調査⁸⁾によると、幼稚園に通う子どもの裸眼視力が1.0未満の者の割合がここ数年20%台後半で推移しており、視力の低下は懸念される点である。

2. 保護者のスマートフォン使用の現状と意識

1) 使用率、時間、主な使用用途

全ての保護者は、スマートフォンを所持し使用していた。最も多かった使用時間幅は、1～2時間までで約4割(40.4%)、次いで～1時間(26.3%)、30分未満(18.4%)であり、全体の8割以上は2時間までの使用であった(図9)。保護者全員がメールやラインなどの連絡用ア

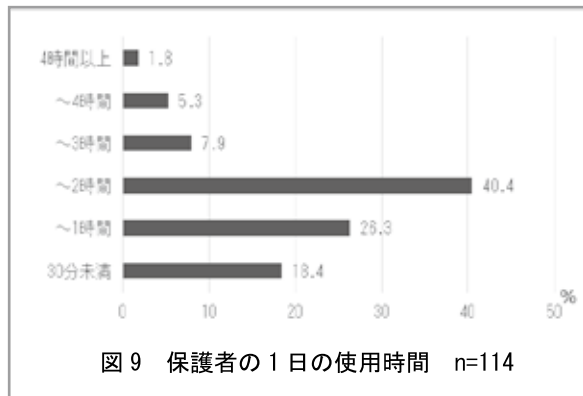


図9 保護者の1日の使用時間 n=114

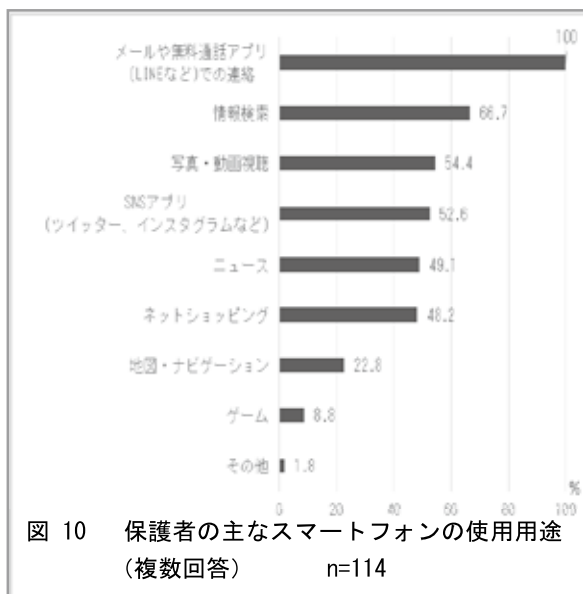


図10 保護者の主なスマートフォンの使用用途 (複数回答) n=114

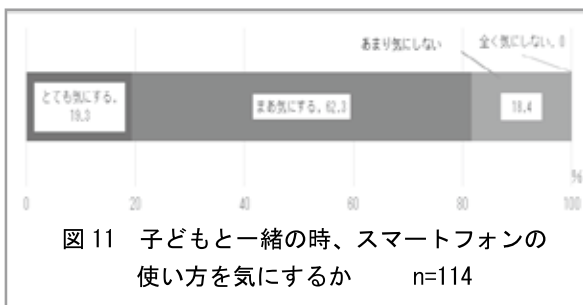


図11 子どもと一緒にの時、スマートフォンの使い方を気にするか n=114

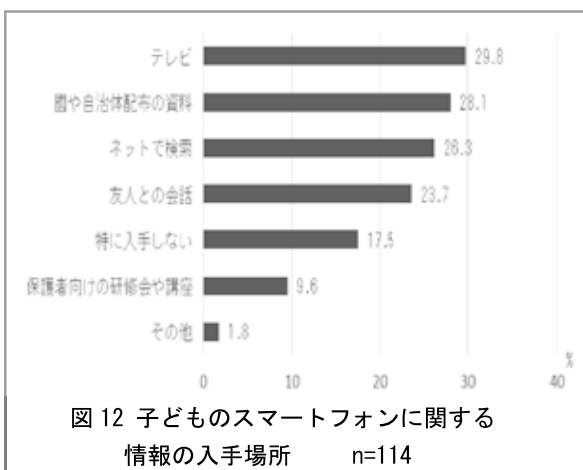


図12 子どものスマートフォンに関する情報の入手場所 n=114

プリを使用しており、次いで情報検索が66.7%、写真・動画視聴54.4%、ツイッター、インスタグラムなどの使用52.6%、ニュースを見る49.1%、ネットショッピング48.2%となった(図10)。現代では、園との連絡や保護者同士の連絡にメールやラインを使用するケースが多く、連絡手段としてメールやラインを使用するのは必然であると考えられる。約半数以上の保護者は、スマートフォンで情報検索、写真・動画視聴、SNSの使用、ニュースをみる、ネットショッピング等を行っており、スマートフォンが生活の一部になっているのがわかる。なお、年代と主な使用用途には、有意差は見られなかった。

2) 保護者自身の使い方に対する意識、知りたいことの有無、情報の入手場所

子どもと一緒にの時、スマートフォンの使い方を気にするかの設問では、「とても気にする」、「まあ気にする」を合わせると81.6%となり、8割以上の保護者は子どもを意識して使用していることがわかった(図11)。一方、約2割(18.4%)の保護者は、子どもと一緒にの時あまり使い方を意識していないという結果となった。乳幼児のスマートフォン使用や影響について知りたいことがあるかについては「いいえ」が56.1%であり、半数以上の保護者は特に知りたいことはないと回答した。知りたいと回答した保護者の内容としては、視力など目に与える影響(17名/46名中)、具体的なメリット・デメリット(13名)、成長や発達、脳への影響(8名)、スマホとの適切なかわり方(5名)、何かをしながらスマホを見せる影響(3名)であった。

乳幼児のスマートフォンに関する情報を得る場所としては、テレビ(29.8%)、国や自治体の配布の資料(28.1%)、ネットでの検索(26.3%)、友人との会話(23.7%)の順となった(図12)。

3. 保護者自身のスマートフォン使用と子どもの使用との関連性

1) 乳幼児期のスマートフォンの使用や影響について知りたいことがあるかと情報の入手場所(表1)

乳幼児期のスマートフォンの使用や影響に関する情報の入手場所の回答に、差異がみられた($p < 0.05$)。傾向として、テレビ番組、国や自治体が配布した資料、ネット検索、会話に比べて、保護者向けの研修会や講座での情報入手が少ないことがわかった。一方、「知りたいことがあるか、ないか」といった保護者の要求と情報の入手場所には関連が見られず、情報の入手先の違いはみられなかった。我々の研究⁷⁾において、不安を持ちながらも使用させている保護者の存在や長時間使用と生活習慣・遊びとの関係、コミュニケーション能力や実体験の減少による五感への影響等、影響が多岐にわたることへの認識不足が課題として挙

げられたことを考慮すると、研修会や講演会といった学習の機会が必要であると考え。特に、子どもが通う幼稚園・保育園（こども園含む）での講演会や学習の機会、身近で気軽に参加できるという点において有効に働くと考えられるので、積極的に推進したい取り組みである。

2) 子どもと一緒にの時に、保護者自身がスマートフォンの使い方を気にする程度と平日における子どもの使用時間（表 2-1 2-2）

子どもと一緒にの時に、自分のスマートフォンの使い方を気にする程度と子どもの平日の使用時間に関しては、有意差がみられた（ $p < 0.05$ ）。すなわち、平日に

において、子どもの前で自分のスマートフォンの使用を気にする度合いの高い保護者は、子どもの使用時間も短いと考えられる。一方、休日においては、有意差は認められなかった。しかし、「とても気にする」では、全ての子どもの使用時間が 30 分程度以下であったのに対し、「あまり気にしない」では子どもの使用が 3 時間以上と回答した保護者が数名いることから、回答数が増えれば平日と同様に「自分のスマートフォンの使い方を気にしない」保護者では、子どもの使用時間が増加する傾向がみられる可能性はある。なお、保護者の使用時間と子どもの使用時間との間には、有意差は認められなかった。

(3) スマートフォンの使用場面の頻度と子どもの使用時

表 1 「乳幼児期のスマートフォン使用や影響について知りたいことはあるか」と情報の入手場所との関連

		スマートフォンに関する情報をどこで入手するか							合計
		ネットで検索する	国や自治体が配布した資料	友人との会話	テレビ番組	保護者向けの研修会や講座	特に入手しない	その他	
乳幼児期のスマートフォン使用や影響について知りたいことはあるか	はい	18 (11.5)	15 (9.6)	15 (9.6)	15 (9.6)	8 (5.1)	5 (3.2)	1 (0.6)	77
	いいえ	12 (7.7)	17 (10.9)	12 (7.7)	19 (12.2)	3 (1.9)	15 (9.6)	1 (0.6)	79
	合計	30	32	27	34	11	20	2	156 *

上段:実数 下段:パーセント

$\chi^2 = 14.70$, * $p < 0.05$

表 2-1 子どもと一緒にの時にスマートフォンの使い方を気にする程度と子どもの使用時間の関連（平日）

		子どもの使用時間（平日）								合計
		0分	15分未満	15分程度	30分程度	1時間程度	2時間程度	3時間程度	4時間以上	
子どもと一緒にの時にスマートフォンの使い方を気にする程度	とても気にする	2 (2.4)	11 (13.4)	2 (2.4)	2 (2.4)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	17
	まあ気にする	14 (17.1)	21 (25.6)	5 (6.1)	6 (7.3)	5 (6.1)	1 (1.2)	0 (0)	0 (0)	52
	あまり気にしない	3 (3.6)	2 (2.4)	1 (0)	3 (3.6)	1 (1.2)	3 (3.6)	0 (0)	0 (0)	13
	全く気にしない	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0
	合計	19	34	8	11	6	4	0	0	82

上段:実数 下段:パーセント

$\chi^2 = 19.04$, $p < 0.05$

表 2-2 子どもと一緒にの時にスマートフォンの使い方を気にする程度と子どもの使用時間の関連（休日）

		子どもの使用時間（休日）								合計
		0分	15分未満	15分程度	30分程度	1時間程度	2時間程度	3時間程度	4時間以上	
子どもと一緒にの時にスマートフォンの使い方を気にする程度	とても気にする	2 (2.4)	9 (11.0)	3 (3.6)	3 (3.6)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	17
	まあ気にする	3 (3.6)	27 (25.6)	4 (4.9)	9 (11.0)	3 (3.6)	3 (3.6)	3 (3.6)	0 (0)	52
	あまり気にしない	1 (1.2)	3 (3.6)	1 (1.2)	5 (6.1)	0 (0)	0 (0)	2 (2.4)	1 (0)	13
	全く気にしない	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0
	合計	6	39	8	17	3	3	5	1	82

上段:実数 下段:パーセント

$\chi^2 = 17.95$, $p = 0.21$

間（平日、休日）（表 3-1 3-2 4-1 4-2）
「家事などで手が離せないとき」「布団やベッドに入ってから寝るまでの間」に使用させている頻度と子どもの使用時間（平日、休日共に）とのクロス集計では、有意差が認められた（ $p < 0.05$ ）。平日、休日共に、家

ながるのではないかと推測できる。また、「子どもを静かにさせたい時」「外出先での待ち時間」「自分の時間を持ちたい時」の頻度と子どもの使用時間（休日のみ）とのクロス集計では、有意差が認められた（ $p < 0.05$ ）（表 5.6.7）。休日においては、「子どもを静かにさせ

表 3-1 「家事などで手が離せないとき」の使用頻度と子どもの使用時間の関連（平日）

		(子ども)平日の使用時間								合計
		0分	15分未満	15分程度	30分程度	1時間程度	2時間程度	3時間程度	4時間以上	
家事などで手が離せないとき	全く使用しない	12 (15.0)	20 (25.0)	1 (1.3)	1 (1.3)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	35
	あまり使用しない	1 (1.3)	4 (5.0)	2 (2.5)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8
	どちらでもない	0 (0)	1 (1.3)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2
	ときどき使用する	5 (6.3)	5 (6.3)	4 (5)	7 (8.8)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	22
	よく使用する	1 (1.3)	2 (2.5)	0 (0)	2 (2.5)	4 (5.0)	4 (5.0)	0 (0)	0 (0)	13
	合計	19	32	8	11	6	4	0	0	80

上段:実数 下段:パーセント

 $\chi^2 = 60.51$, $p < 0.01$

表 3-2 「家事などで手が離せないとき」の使用頻度と子どもの時間の関連（休日）

		(子ども)休日の使用時間								合計
		0分	15分未満	15分程度	30分程度	1時間程度	2時間程度	3時間程度	4時間以上	
家事などで手が離せないとき	全く使用しない	5 (6.3)	23 (28.8)	2 (2.5)	3 (3.8)	1 (1.3)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	35
	あまり使用しない	0 (0)	4 (5)	2 (2.5)	2 (2.5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8
	どちらでもない	0 (0)	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	2
	ときどき使用する	1 (1.3)	9 (11.3)	3 (3.8)	8 (10)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	22
	よく使用する	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	4 (5)	1 (1.3)	2 (2.5)	4 (5)	1 (1.3)	13
	合計	6	37	8	17	3	3	5	1	80

上段:実数 下段:パーセント

 $\chi^2 = 60.37$, $p < 0.01$

表 4-1 「布団やベッドに入ってから寝るまでの時間」の使用頻度と子どもの使用時間の関連（平日）

		(子ども)平日の使用時間								合計
		0分	15分未満	15分程度	30分程度	1時間程度	2時間程度	3時間程度	4時間以上	
布団やベッドに入ってから寝るまでの時間	全く使用しない	18 (22.5)	27 (33.8)	8 (10)	9 (11.3)	2 (2.5)	3 (3.8)	0 (0)	0 (0)	67
	あまり使用しない	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1
	どちらでもない	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2
	ときどき使用する	0 (0)	4 (5)	0 (0)	2 (2.5)	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	7
	よく使用する	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2.5)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	3
	合計	19	32	8	11	6	4	0	0	80

上段:実数 下段:パーセント

 $\chi^2 = 36.45$, $p < 0.05$

事の間や寝るまでの時間にスマートフォンを使用していると、子どもの使用時間が長くなる傾向になると考えられる。これは、スマートフォンをよく使用する場面であり、習慣化してしまう結果、長時間使用につ

たい」「出先での待ち時間」「自分の時間を持ちたい」といった保護者の都合により、子どもにスマホの使用を許可したり、使用するように促したりしている現状が伺え、それがスマホの使用時間の増大に影響してい

表 4-2 「布団やベッドに入ってから寝るまでの時間」の使用頻度と子どもの使用時間の関連（休日）

		(子ども)休日の使用時間								合計
		0分	15分未満	15分程度	30分程度	1時間程度	2時間程度	3時間程度	4時間以上	
布団やベッドに入ってから寝るまでの時間	全く使用しない	6 (7.5)	32 (40)	8 (10)	13 (16.3)	2 (2.5)	2 (2.5)	4 (5)	0 (0)	67
	あまり使用しない	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1
	どちらでもない	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2.5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2
	ときどき使用する	0 (0)	4 (5)	0 (0)	1 (1.3)	2 (2.5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	7
	よく使用する	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	1 (1.3)	1 (1.3)	3
		6	37	8	17	3	3	5	1	80

上段:実数 下段:パーセント

$$\chi^2=52.54, \quad p<0.01$$

る可能性があることは無視できないと考えられる。その結果、知らないうちに依存的な状況になり、それがさらに使いたがるという子どもの行動につながる可能性もある。スマートフォンが、親の育児負担の軽減ができるツールとして使用できることは利点ではあるが、使用場面に関しては習慣化しないように配慮すると共に、子どもが楽しめる遊びを工夫し提供することが求められる。

まとめと今後の課題

本研究では、乳幼児期のスマートフォン使用の現状に加え、保護者の使用状況が子どもの使用に及ぼす影響について明らかにすることが目的であった。本研究の結果、以下のことが明らかになった。①乳幼児期の子どものスマートフォン使用は一般的になっており、低年齢から使用していた。②子どものよく使用する機能は、動画を見る、写真を撮る・見るであった。動画ではYouTubeの動画サイトの視聴が7割弱と最も多かったが、YouTubeなどの動画サイトの利用と子どもの使用時間に関しては、関連が見られなかった。③約8割の子どもはスワイプをすることができ、約半数の子どもは、写真を撮る、画面を拡大縮小する、アプリを

開くことができた。④スマートフォンを使用する場面では、約4割以上の保護者が、子どもが使いたがる時や家事などで手が離せない時によくあるいは時々使用していた。約3割の保護者は、外出先での待ち時間や子どもを静かにさせたい時などで使用していた。一方、半数以上の保護者は、寝るまでの間、交通機関での移動時間、自分の時間を持ちたい時、子どもを静かにさせたい時といった場面では全く使用しないと回答しており、使用場面においては保護者の意識の二極化がみられた。⑤9割の保護者は使用時にルールを決めて、子どもの使用に配慮していた。しかし、ルールを決めているからといって必ずしも使用時間が短いという結果ではなかった。画面に目を近づけすぎないルールは先行研究⁽⁷⁾に比べて割合が高く、視力低下を懸念する保護者の様子が伺えた。⑥すべての保護者は、スマートフォンを保有しており使用している。全体の8割以上は、1日2時間までの使用であった。メールやラインなどの連絡用アプリは、全ての保護者が使用していた。保護者の半数以上は、スマートフォンで、情報検索、写真・動画視聴、SNSの使用、ニュースをみる、ネットショッピング等を行っており、スマートフォンが生活の一部になっているのがわかった。⑦約8割の保護者は、子どもと一緒にの時に自身のスマートフォンの

表 5 「子どもを静かにさせたい時」の使用頻度と子どもの使用時間の関連（休日）

		(子ども)休日の使用時間								合計
		0分	15分未満	15分程度	30分程度	1時間程度	2時間程度	3時間程度	4時間以上	
子どもを静かにさせたい時	全く使用しない	5 (6.3)	17 (21.3)	4 (5.0)	8 (10.0)	0 (0)	2 (2.5)	3 (3.8)	0 (0)	39
	あまり使用しない	0 (0)	7 (8.8)	1 (1.3)	3 (3.8)	0 (0)	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	12
	どちらでもない	1 (1.3)	1 (1.3)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	1 (1.3)	5
	ときどき使用する	0 (0)	11 (13.8)	2 (2.5)	4 (5.0)	3 (3.8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	20
	よく使用する	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	2 (2.5)	0 (0)	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	4
		6	37	8	17	3	3	5	1	80

上段:実数 下段:パーセント

$$\chi^2=43.87, \quad p<0.05$$

表6 「外出先での待ち時間」の使用頻度と子どもの使用時間の関連（休日）

		(子ども)休日の使用時間								合計
		0分	15分未満	15分程度	30分程度	1時間程度	2時間程度	3時間程度	4時間以上	
外出先での待ち時間	全く使用しない	4 (5.0)	11 (13.8)	2 (2.5)	10 (12.5)	1 (1.3)	1 (1.3)	3 (3.8)	0 (0)	32
	あまり使用しない	1 (1.3)	9 (11.3)	2 (2.5)	3 (3.8)	0 (0)	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	16
	どちらでもない	0 (0)	3 (3.8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	4
	ときどき使用する	1 (1.3)	13 (16.3)	4 (5.0)	3 (3.8)	2 (2.5)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	24
	よく使用する	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	1 (1.3)	1 (1.3)	4
		6	37	8	17	3	3	5	1	80

上段：実数 下段：パーセント

 $\chi^2=41.91$, $p<0.05$

表7 「自分の時間をどうしても持ちたい時」の使用頻度と子どもの使用時間の関連（休日）

		(子ども)休日の使用時間								合計
		0分	15分未満	15分程度	30分程度	1時間程度	2時間程度	3時間程度	4時間以上	
どうしても自分の時間を 持ちたい時	全く使用しない	3 (3.8)	24 (30)	6 (7.5)	10 (12.5)	2 (2.5)	2 (2.5)	1 (1.3)	0 (0)	48
	あまり使用しない	2 (2.5)	5 (6.3)	0 (0)	2 (2.5)	1 (1.3)	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	11
	どちらでもない	1 (1.3)	2 (2.5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1.3)	1 (1.3)	1 (1.3)	6
	ときどき使用する	0 (0)	5 (6.3)	2 (2.5)	5 (6.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	12
	よく使用する	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2.5)	0 (0)	3
		6	37	8	17	3	3	5	1	80

上段：実数 下段：パーセント

 $\chi^2=49.68$, $p<0.01$

使い方を意識するが、約2割の保護者はあまり意識しないという結果となった。子どもの前で自分のスマホの使用を気にする度合いの高い保護者は、子どもの使用時間も短い傾向が示され、保護者自身の使い方の意識が子どもの使用時間に影響している可能性が示唆された。⑧乳幼児期のスマートフォンの使用や影響に関する情報の入手場所は、テレビ番組、国や自治体が配布した資料、ネット検索、会話に比べて、保護者向けの研修会や講座での情報入手が少ない傾向にあることが明らかになった。⑨平日、休日関係なく、家事の間や寝るまでの時間に使用させていると、子どもの使用時間が長くなる傾向にあった。⑩休日においては、子どもを静かにさせたい、出先での待ち時間、自分の時間をもちたいといった時に使用していると、使用時間が長くなる傾向にあった。⑪使用のルールを決めても、必ずしも使用時間が短くなるとは限らないことが示唆された。長時間使用にならないように保護者が子どもの使い方のルールを決めることが推奨されているが、ルールを決めるだけではなく、上述したように使用場面に関しても配慮することが求められると考えられる。

今回、保護者の使い方の意識や使用ルールと子どもの使用時間、長時間使用につながる可能性のある使用

場面、情報の入手場所に新たな知見を得ることができた。しかし、調査対象が1園のみであったため、調査結果の解釈に選択バイアスがある可能性がある。今後、更に対象者を増やしての検討、検証が必要である。また、本調査の子どもは長子のみであったが、第1子よりも第2子以降の方がスマートフォンの使用率が顕著になるという報告があるため、第2子以降の使用に関しても調査の必要があると考える⁴⁾。

最後に

2020年、新型コロナウイルスの感染拡大により、子どもと情報通信機器の関わりは大きく変容したと考えられる。休校や外出自粛が続き、子どもたちが家庭で過ごす時間が増えた。膨大な時間を家で過ごすうちに、スマートフォン等の利用時間やYouTube等の視聴時間が増えたことは想像に難くない。また、学校の一斉休校により対面授業が不可能になり、小・中・高校でも徐々にオンラインによる授業が始まった。本人や保護者の意思に関係なく、スマートフォンやタブレットなどの情報通信機器に関わらざるを得ない状況となり、同様の状況は今後も続くと考えられる。

本研究の結果は、コロナ禍前年（2019）のものである。コロナ禍によって、今後、子どもや保護者とスマートフォンの関わりはどのように変化するのだろうか。本研究が、子どもとスマートフォンとの関わりを考える一助となれば幸いである。

謝辞

本研究にあたり、アンケートにご協力いただきました保育園の先生方及び保護者の方々のご協力に感謝申し上げます。

引用・参考文献

- (1) 総務省 令和元年度版情報通信白書 2019
- (2) 日本小児科医会 <https://www.jpa-web.org/information/sumaho.html> 2020 年 8 月 10 日アクセス
- (3) 総務省 平成 30 年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書 2019
- (4) 総務省情報通信政策研究所 未就学児等の ICT 利活用に係る保護者の意識に関する調査報告書 2015
- (5) 子どもたちのインターネット利用について考える研究会 未就学児の生活習慣とインターネット利用に関する保護者の意識調査 2016
- (6) 総務省情報通信政策研究所 子どもの ICT 利活用に係る保護者の意識に関する調査報告書 2015
- (7) 桼垣淳子 乳幼児のスマートフォン使用の現状と保護者の意識からみる課題と今後の取り組み 中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要 第 50 号 pp. 189 - 195 平成 30 年
- (8) 文部科学省 学校保健統計調査 2019